

---

# Deep Bond

SRNEKO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Deep Bond

### 【NNコード】

N1455B

### 【作者名】

SRNEKO

### 【あらすじ】

十年以上、親友だとと思っていたあいつを、僕は、殺したいと思つてしまつた。

彼の存在は絶対だ。私は彼を信じない人の存在を認めない。だから私は、彼を人間じゃないと言う彼女を殺す。

あの男の存在は許されるものじゃない。彼に関わった人間は、皆死ぬ。ならば、私は彼を殺し、そして私も死ぬ。それですべては終わ

るのだ。

俺は親友を死なしてしまった。否、もともとそのつもりでいたのだ。  
しかしそのショックはあまりにも大きかった。だから俺は、すべて  
を委ねることにする。

プロローグ ↗ 篠祐爾の章

文武両道で、目鼻立ちが整い、常に笑顔を絶やさない優しく性格の良い男なんていうのは、僕としてはいけはならないと思う。神は人に「物を与えない筈であるのに、これではその言葉は間違いでいる。ということから（それだけではないが）、僕は神信じていな。しかもその一物以上を与えた男が、僕の幼馴染で、それでいて親友だというのだ。それは良いことでもあるのだが、同時に僕に対しての陰湿な虐めが繰り返されている。

彼の名前は菊田銀次。周りからはギンちゃんと呼ばれている。彼は現在一人暮らしをしているが、一年前までは家族四人で暮らしていた。そのときの家が、僕の家から道路を挟んだ向かい側にあり、僕らはまるで兄弟のようにして育つた。

そんな彼は何でもできるし、容姿も申し分ないため、周りから多くの注目を集めた。そして高校生になつてからというもの、いつも一緒にいた僕は、彼と比べられ、その存在自体にコンプレックスを抱くようになった。いずれそれは限界に達し、僕は彼を鉄柵の無い屋上へと呼び出した。ここには自分の腰の高さほどの塀しかないと、誤つて人が落ちるということも可能性としては有り得る。創立以来、事故が無かつたのは奇跡に近いように感じるが、僕はそれを感謝している。

彼が来て、塀の側で僕の思つてることを伝えた。僕のこの先の未来のため、君は邪魔なのだと。今まで仲良くしてくれて、ありがとう、と。そして僕は、彼を突き飛ばした。しかし彼は僕の腕を両手で掴み、目一杯引いた。そうして彼は、ギリギリのところどまり、代わりに僕は頭から裏庭に向かつて落下した。

落ちている最中、彼が僕を見下ろしていることに気が付いた。彼は

口の端を歪め、微笑んでいた。

そのとき、僕は全てを見つた。

何もかも、彼の筋書き通りなのだ。きっと、だいぶ前から僕は不要だったのだ。いや、もしかしたら、出会ったそのときから、僕は邪魔者だったのかもしれない。彼の性格を考えれば、今まで僕が生きていたのは、ただ単に彼の気紛れだったのかもしれない。

嗚呼、全ては彼に関わってしまったのがいけないのだ。彼は、普通に告白した。

そういうえば半年前、彼に彼女ができた。僕らと同じ年で、三年間クラス委員を務めた女性だ。そんな彼女も容姿端麗で、それでいて眼鏡が似合う知的な女性だった。僕は一年生の入学式の日、彼女を見たそのときから好きだった。一目惚れだった。けれど自分に自身のない僕は、告白する勇気などなかった。そして半年前、彼女は菊田に告白した。

僕は心からお似合いのカップルだと思った。二人ならうまくいく。こんな僕といふよりも、彼といたほうが、彼女も幸せになれる。そう思っていた。しかし彼の本性を知った今、彼女のことが心配でならない。

菊田銀次。もしも彼女を死なせたりしたら、僕は君を許しはしない。

決して、許しはしない

# 第一章 太田亞季の章

## 第一章 「太田亞季の章」

太田亞季

私が彼と付き合うようになつてちょうど半年が経つた頃、彼に良くなつづいていた篁が、彼を殺そうとして死んだ。彼は篁の手を掴んだことを悔いていた。しかし私は彼の行動は的確なものだと思う。だって、篁よりも彼のほうが明らかに優れた人間であるのだから。それを彼にわかるため、言葉をえて伝えた。それでも彼は自分の行いを悔いた。俺が死ねばよかつたのだと、何度も言い続けた。その時だ。私は自分を最低な人間だと思った。だって、これほどまでに彼に想われている篁に、嫉妬してしまったのだから。彼の中から、篁祐爾という存在を消し去りたい。彼に、私だけを見ていて欲しい。もう、存在しない人間なんて忘れて欲しい。そう想い始めてから、一年が経つた。

私は彼ほど学力が無かつたけれど、同じ大学に通うため、寝る時間割いて勉強をした。しかし結局は彼の望む大学に合格はできなかつた。私はもう一つ下のランクの大学に合格して、そこに通つていた。

同じ学校には通えなかつたけれど、それでも私たちは一日に一回は会つていた。これは彼が言い出したことで、私はとても嬉しかつた。だって、学校も全然逆の方向なのに、こんなにたくさん合えるだなんて思つてもいなかつたから。一週間に一度会えれば良い方なのだと思つていたから。

そして私は、彼と会つときに、大学の友人を連れて行くことが多くなつた。私は彼を自慢したかったのだ。彼に会う友達は皆、期待通りの反応を見せてくれる。それを見ていて本当に楽しかつた。も

う簾のことなどどうでも良かつた。彼だつて簾のことは話さないしきつともひ忘れているのだ。もう、私だけを見てくれているのだ。

そう思いかけていたとき、私の邪魔者が現れた。

順藤恵莉。すとうえり 大学に入つてから出来た、一番の友達、いや、親友と

も呼べるような間柄の彼女だけは、皆と違う反応を示した。最初彼を見たときは、皆と殆ど同じだったのだけれど、話をするにつれて、彼女の顔から笑顔が消えた。そして彼女は、私の耳元で囁いた。

「彼、普通じやないよ」

私はその言葉の意味がわからなかつた。彼は普通じやない。そんなこと、見ればわかることだ。あれほどできた人間はこの世にそつたくさんいるものではない。だから普通の人とは違う。普通じやないのは当たり前なのだ。けれど、彼女の表情からその言葉は良い意味として捉えることができなかつた。彼女は彼を恐れている。そう見えた。

「だつて、会つてからずつと笑つてるんだよ？ そんなの人間として間違つてゐるよ」

それからだ。私は彼女と口を利かなくなつた。彼女が話しかけてきても無視した。彼女は間違つてゐる。彼は、私の友達だからと、笑顔を絶やさないでいてくれたのだ。その行為をおかしいなどと言ふなんて、人間として間違つてゐるのは彼女のほうだ。

不愉快だ。彼を貶す人間なんて、この世から消えててしまえば良い。

消えろ 消えろ消えろ消えろ消えろ キエロ。

私の中の何かが外れたような気がした。

順藤恵莉

私は亜季と遊ぶことになつた。その日は彼女の彼氏も一緒で、もしかしたら悪いことをしたと思った。

亜季が私のことを紹介している間、私はずっと彼のことを見ていた。とても優しそうな感じがして、こんな人といられる亜季はとて

も幸せな人だと思った。しかしそれは間違いだつた。彼と話をしてみると、私は気持ち悪くなつてきた。けれどそれを気付かれないように表情は変えないでいた。そうだ、今の私がやつてていることと同じようなことを彼はしているのだ。きっとそれは、私の前だけではない。今までにも何人もの友達が会いに来ているというから、彼らはこの仮面に騙されているのだ。だから私が彼のことをどうだつたかと尋ねると、とても格好良く、優しい人だつたというのだ。

私にはこの菊田銀次という人間が容易に想像できた。彼は会う人によつてその仮面を使い分けているのだ。それは些細な違いであつても付け替える。まったく同じ人間などいないのだから、彼にとつてそれは当たり前のことなのだ。だから彼が私と亜季と話をするときだつて一々仮面を付け替えていた。

しかしそれは、感心すべきところでもあつた。こんな多種多様にある仮面を使い分けることができる人間なんてそうはない。その点では、彼はとても優れた人間なのかもしれない。

ただ、私は彼には一度と関わりたくない。そう思った。

菊田銀次と会つた一日後、亜季が私のことを避けていることに気が付いた。最初は何かの「冗談か」と思ったのだが、それが何日も続くと本気なのだと解る。

そのとき初めて気付いた。あの男に会つたこと自体が間違いだつたのだ。一度関わつてしまつてはその糸からは逃れられない。たとえ彼の仮面に気付いていても、それは意味を成さないので。そして彼と付き合つてゐる亜季は、その糸に全身を覆われ、侵されている。だからこうして、私が彼に惹かれなかつたのを見て、それだけで避けるようになつた。

私は覚つた。

これが篁君を殺した男の仕業なのだと。

そして、次なる標的は、私なのだ。

恵莉は私が何をしようとしているのか気付いているようだつた。私が彼女に近づかないようにしてゐるのに気付くと、彼女もそれに合わせて私と口を利かないようになつた。

しかしそれだけで私は諦めない。彼の魅力に気付かないような人間に生きる価値などない。だから決して彼女の存在を認めない。以前友達であった彼女は、もうすでにそれではない。単なる敵でしかありえない。

だから決めた。明日、私は彼女を殺す。

私は友達を使って、順藤恵莉を大学の駐車場に呼び出した。時刻は午後十一時を少し過ぎた頃、彼女はそこに現れた。私はそこに一台だけ停めてある車の中にいる。それは彼の車で、今日一日だけ借りることになつていた。

彼女は車の助手席側の窓を叩いた。彼女からは暗くて私の顔が見えないらしい。そうなるような場所に車を停めたのだから当然だ。私は助手席側の鍵を開けた。そして彼女が乗り込み、ドアを閉めるのを確認すると、エンジンを掛けた。だがアクセルは踏まない。これは彼女の悲鳴を搔き消すためだけのものだから。

私は腰に携えていた果物ナイフを取り、それを思い切り彼女の腹部を目掛けて刺した。彼女は小さな悲鳴を上げ、驚いたような表情をしていた。そしてそれは、私も同じだつた。間近で見たそれは、恵莉を呼びに行かせた友達だつた。

何故あなたがここにいるの？ 私はあなたなんて呼んでいない。

私が呼んだのは順藤恵莉。彼女はどこ。彼女は、どこ。

その時だ。運転席側の窓を、誰かがノックした。振り向くと、何か黒い穴がこちらに向いていた。それが何かを確認する間もなく、火花が散つた。

私は、月明かりに照らされた、順藤恵莉の笑顔を見た。



## 第一章 順藤恵莉の章

順藤恵莉

手軽に誰もが扱えるような銃というのが、インターネットを通じて容易に購入できるなどとは思いもしなかった。ただ法外な金を払いさえすれば、送り先の書いていない紙の貼られた発泡スチロールの箱に入れられた拳銃が届く。

それを発砲したとき、その直後の爽快感といつたらなかつた。凄く気分が良かつた。自分を殺そうとしていた人間を殺すことができた。最高ではないか。これさえあれば、私は菊田にだつて負ける気はしない。あの人の皮を被つた男を、私は殺せる。

彼を殺せば、すべては丸く收まる。彼がいたから、私が好きだつた篁君は死に、そしてあいつに侵された亜季までもが死んだ。あとは彼が死にさえすれば良い。いや、そのあと私も死ぬべきなのだろう。このことに関わってしまった人間は、誰一人として生きていってはいけない。そんな気がする。

あの菊田銀次は、ウイルスだ。すべての人間関係を破壊する。そして人々は争い、死に至る。それを彼は自由に引き起こせる。そんな人間がいていいのだろうか。否、そんなはずがない。神が存在するのであれば、絶対に菊田銀次を認めない。彼は存在すら許されない人間だ。

私は、彼を殺さなければならぬ。

私は亜季のような安易な考えはしない。彼女は頭も良く、それでいて人懐っこい性格であったが、あの男ということによって変わつてしまつたみたいだ。そうでなければ、私を殺すなどと考

えるはずが無い。

何故なら、私よりも彼女のほうが優れているから。成績だつて彼女のほうが上。それはすべてにおいてそうだった。私たちは親友であると同時にライバルでもあった。私はそう思っていたのだが、彼女は違つたのだろうか。いや、最初はそうだったのだろう。やはり何もかも、あの男が原因だ。あの男に関わることは許されない。

私は、自室で寛いでいた。今週中にもあの男を殺さなければならない。それと同時に、私もこの世から消え失せなければならない。何故なら、私も亜季同様、あの男に侵され始めているからだ。

私は変わつてしまつた。つい最近まで普通の大学生として、至つて眞面目な日常を過ごしていた。それはつまらないものであつたが、けれどそれでいて充実した日々を過ごせていた。しかし篁君を殺した男の恋人が近くにいると知つたとき、彼女に接触せざるを得なかつた。するとその人は、私が思つているような人間ではないことがわかつた。きっと、あの男が篁君を殺したことを見たのだと思つた。だから彼女とは普通に接することができた。

そういうえば、彼女には私だけの秘密を教えたことがあつた。私は、篁祐爾という従兄がいて、私は彼が好きだつたということ。そして彼が一年前に菊田銀次を殺そうとして、誤つて転落死したといふこと。それを聞いた彼女は、彼のことを知らないようだつた。同じ高校に通つていても、顔を知らないということは良くある話だから気にはしなかつた。けれども、篁君が幼い頃から一緒にいた菊田を殺そうとするなど、考えられなかつた。

篁君からは、菊田はとても良い人だと聞いていた。そして自分の兄のようだとも言つていた。それなのに殺そうとするなど、ありえない。きっと何かがあるはずなのだ。

そして私は、亜季に頼んで菊田に会わせてもらつた。私がそれを頼んだとき、彼女は嬉しそうだつた。それほど自慢の恋人なのだと思つた。

それからまだ一ヶ月半。つまり、菊田銀次に会つてからたったの一ヶ月半で、私は親友を殺してしまった。自分が殺されるのが嫌で、ただそれだけの理由で殺してしまった。けれど後悔はしていない。私は彼女を救つたのだ。どんなに犠牲を払つても、あの男だけは殺さなければならぬ。

そう思つていたある日のこと。その日は東京には珍しく、雪が降り積もつていた。

私はいつものようにあの男を殺す方法を考えながら、家路についていた。ただその日は特別寒かつたため、コンビニで暖かい食べ物と飲み物を買うことにした。おでんを専用の器に入れている最中に、背後から声を掛けられた。私は予想もしていなかつた出来事に驚き、背筋が凍るような感覚がした。それと同時に恐怖した。

「あ、驚かせちゃつたかな。ごめんね」

菊田銀次。彼が私に接觸してきた。私はおでんの具を器に入れながら答えた。

「……いえ、大丈夫ですよ。でも、なんで菊田さんがこんなところにいるんですか？」

「別にたいした理由は無いよ。ほら、亜季が殺されちゃつたからね。その上車も無くなつた。もう僕には何も残っちゃいないから、適当にぶらぶら歩いていたんだよ。そうしたら偶然見知つた顔を見たからね。ついつい声を掛けちゃつたんだ。もしかして、迷惑だつた？」

いつものコルイ表情で、そしてとても優しい声。これに騙される人がいるのは仕方の無いことだと思う。だけど私はその手には乗らない。そのことは彼も知つてゐるはずだ。なのに何故？

「迷惑なんかじゃないですよ。ただ、あんなに遠いところから良くなつたな、つて」

私は動搖しながらも、それを覺られないようにおでんの入つた器と熱い缶コーヒーをレジに置きながら答えた。すると彼は財布を取り出し、千円札を店員に渡した。

「おつりはいらぬです」

彼はそう言つて、蓋をされたおでんと缶コーヒー、割り箸の入ったビニール袋を持つて外に出た。私は慌ててそのあとを追つた。

私は、彼の隣に立つた。

「それ、なんで菊田さんが払つたんですか？」

「うーん、払いたかつたからかな。それより、君の家に連れてつてよ。僕、今住むところ無くてさ」

私の部屋に、私と一人の男。この状況はまさに殺してくださいと言つているようなものだ。私は銃の入つている机の引き出しのすぐ前に座つている。そのためいつでも銃を取り出し、殺すことができるので私は、訊くことにした。

「何故、あなたはここに来たの？ 殺されるのが目的なの？」

彼は笑顔を崩さずに口を開く。ただ、いつもとは違う雰囲気だ。「そうだね。殺されても良いと思っている。僕と深い繋がりを持つてしまつた人は必ず死んでしまう。何故なんだろうね。死んで欲しくないと望んでも、彼らは皆死んでしまう。君、祐爾のこと好きだつたんでしょ？ 知つていてるよ。前に、君に告白されたと聞いたから。それと、亜季を殺したのは君だ。原因はやっぱり僕なんだけどね。ただ、関係のない人を巻き込んだのは君の責任だ。僕には関係ないよ。まあ、僕を殺したあと自分も死のうとしている人間には、何を言つても無駄なんだろうけどね。……しかし本当に辛いよ。大好きな人が、どんどん死んでしまうのだから」

おかしい。彼は今にも笑顔を崩し、泣いてしまいそうな表情をしている。今までの彼からは想像もできないその顔に、私は動搖した。どんなときも笑顔で対応し、笑顔で人を騙すこの男。

あなたは一体何者なの？

否、この男は人を騙すためならば何でもするのだ。そして私はそれを知つていてる。だからこうしていつもと違う自分を見せているのだ。自分を信用させるために。

「亜季が死んで、一週間が経つた頃だ。僕はマンションを引き払つ

た。家具などは全部捨てた。何着かの服と、金さえあればそれで良い。まあそれ殆どが盗まれてしまつて、今やこの服と財布しかなければ。カードが盗まれなかつたのは運が良かつたよ。そのおかげで死なずには済んでいるから。しかしおかしいよね。この世に存在してはいけない自分は、生きるのに必死なんだから。死にたくないなんて思つてはいけない存在なのにね」

ついに彼は表情を崩し、悲しそうな目をした。そのとき気付いた。この目は見たことがある。きっと、私はこの人を誰よりも知つている。写真ではあつたけれど、あなたのその表情は、私の好きな人とまったく同じものだ。

ああ、ずるいな。こんな顔されたら、殺したくても殺せないじゃない。

私の手は、自然と机の引き出しから小振りな銃を取り出す。そして銃口は、私のこめかみに当たられる。これで良い。ほら、彼が笑つていてる。私の好きな彼のその顔が、笑つていて。

そうだ。あなたは、菊田銀次なんかじゃない。私の大好きな、篁祐爾だ。あなたのこと悪く言つたりしてごめんなさい。

引き金を引く、カチリという音が、頭の中に響き渡つた。

菊田銀次

人の死というものが、どれほど恐ろしいものなのか。俺は、祐爾が死んだそのとき、初めて思い知った。避けなければ良かつた。俺が死ねばよかつたのだ。

亜季にそう言つたら、そんなことはないと言われた。俺のしたことは正しいのだと、何度も言い聞かせようとしていた。それが余計に辛かつた。祐爾が心から好きだつた亜季は、死んだのが俺ではなく、祐爾であるのが当然のように言つ。

俺はここから間違つてしまつたのだろう。俺がこうして、彼女の想いを受け入れてしまつたから。もしあのとき断つていれば、君は死ぬことはなかつたし、俺たちは親友のままでいられたのだろう。死のう。

そう思つたが死ねなかつた。俺には、死ぬ勇氣すらなかつたのだ。自分の愚かさを呪う。死ぬことも、あいつに謝ることも何もできない。俺は祐爾を死なしてしまつたという事實を忘れられないまま、一生を過ごすことになつてしまつのか。

亜季は俺を見ていてくれるかもしれない。けれどそれは永遠じゃないと思う。きっと俺のほうから別れを告げるだろう。俺といれば絶対に不幸せになつてしまつ。

ならば、俺は一体どうすればいいのだろう。

そうだ。俺が篁になるといふのはどうだらう。そうすれば亜季を愛することができるはずだ。俺は独りになりたくない。今の俺には、親友の死よりもそれのほうが優先される。今日から僕は、篁祐爾だ。

気付いたとき、僕は暗闇の中にいた。いつの間にか寝ていたらしく。親友が死んだというのに、良く寝ていられるものだ。

僕自身の手で殺したからだろうか。だから悲しいとは思わない。ただ、僕は本来死んだ身だ。だから死んだ親友の名前を借りよう。そして彼には礼を言おう。君の身体をくれてありがとう。菊田銀次。僕の代わりにゆっくりと寝ていてくれ。

翌日、この「僕」という一人称について亜季から指摘された。その理由は前もって考えてあつたので、その通りに伝えた。死んだ親友の一部を受け継ごうと思ったからと。別に嘘は言っていない。多少の誤りはあるものの、僕は死んだ親友から、身体というものを受け継いだ。別に彼女はそれで納得しているのだからそれでいい。僕は彼女を想い続ける。彼にはその自信が無かつたみたいだけれど、僕ならば出来る。

彼に出来て僕に出来る、唯一のことだつた。

しかし今となつては、彼に出来ることも全て出来る。素晴らしいことではないか。これからは何でも出来る。そう言つても過言ではない。彼の才能は全て僕のものだ。

僕は、亜季と同じ大学に通おうと思つたのだが、彼女が僕のことを考え別の大学に通うこととなつた。彼女は、自分が僕に追いつけなかつたのが悪いのだと謝つた。しかし、悪いのは僕だと思った。なぜなら僕は、他人の頭脳を使用しているのだから。

大学生活最初の夏。亜季は僕に多くの友人を紹介するようになつた。それは自慢のためだとわかつてゐた。けれどいつものように接した。本物の彼のように、誰にでも優しく、恋人とか関係なく優しい人間であり続けた。そうすることで亜季は満足する。それを見ていると、嬉しくて堪らなかつた。

しかし、そこに恵莉が現れた。彼女は僕が普通でないことをすぐに寢つた。きっと彼女は、親類の仲で最も親しかつた女性だろう。だから僕のことに薄々気づいているようだつた。ただ、僕が菊田だということを前提に何かを探つてゐる。きっと彼女は、僕が菊田銀次を殺そうとしたなどと、信じていない。一方的に僕が殺されたと

思っているはずだ。本当は僕が生きていることを伝えたかったが、それをしては面白くない。だからもう少し待つことにした。

恵莉はきっと何かする。それを見届けたかった。

それから一ヶ月。彼女が住んでいるマンションに向かつた。別に彼女に会つつもりはない。ただ、亜季と口を利かなくなつたという彼女が、今何をしているのかが気になつたから見に来た。それだけの理由だ。

僕は近所の公園やコンビニで、彼女が近くを通るのを待つた。午後五時。コンビニで雑誌の立ち読みをしていると、彼女が目の前を通つた。一瞬ドキリとした。ここまで唐突に現れるとは思つても見なかつたから。そしてこのあと、彼女が入つてきたら逃げ道はない。しかし彼女は、前を見つめたままコンビニの自動ドアの前を通り過ぎていつた。

安心して肩を落とすと、後ろから声を掛けられた。それは毎日のように聞いている声。まさかこのようなどころにいるとは思わなかつた。恵莉と口を利かなくなつてしている筈だ。それなのに何故？

「銀ぐんなんでこんなところにいるの？」

彼女はあまり疑つてはいる風ではなかつた。それならば僕の嘘を信じるだろ？

「こちに良いスポーツ用品店があるって聞いたから、ちょっとね。で、亜季はどうしてここに？」

「ん？ エーと、私はそのマンションに友達がいるから、そこに行くつもりなんだ」

「そうか。しかし驚いたな。こんなところで会うなんて」

「そうだね。やっぱり私たちは神様にも認められたカップルなのかもね」

「かもね。じゃあ、そろそろ行って来るよ」

亜季と別れ、先ほど口にしたスポーツ用品店に行った。もしもあとで問い合わせられたらどうしようもないから。しかしこの周辺のこと調べておいて良かった。

そういうえば亜季は何故あの場所にいたんだ？　本当に友達に会うためなのならば良いが、その友達が恵莉だった場合、何をしようといつのだろう。

まあ気にしたってしようがない。とにかく今は、たいした興味もないところで時間を潰し、帰るとしよう。何も買わなかつたことを問われた場合の言い訳も考えてある。

一週間後、亜季が僕の車を借りたいと言つたので、快く承諾した。ただ、様子がおかしかつたのでその後を尾行した。

すると彼女は、大学の駐車場に車を停めた。一体何をすると言うのだろう。

暫く待つていると、彼女の友達が車に向かっているのを見つけた。一度会つているので顔は覚えてい。ただ、名前までは覚えていないが。

そしてその数分後、恵莉が来た。

僕は慌てて近くの茂みに隠れた。彼女にだけは見つかってはならない。そう思つたから。彼女は亜季の乗る車の運転席側に立つと、何かを亜季に向けた。それが銃だと気付いたときには、既に銃弾が放たれていた。

亜季が死んで、どれだけの時が経つだらうか。まだ季節が一つ動いただけなのだが、それが何年も経つたように感じる。僕は亜季が死ぬのを見ていた。僕にはそれを止めることができたはずだ。恵莉が亜季を殺すことが有り得ないことではない。どこのでだって殺人は行われているのだ。その被害者と加害者が自分の知っている人間であろうと、それはなんらおかしいことではない。

僕は、愛する人を失つた。僕はどうすればいいのだらう。復讐か？　だが、そんなことをして誰が喜ぶ。亜季がそれを見ていたとして、彼女は僕になんと言つだらう。ありがとう、そんな言葉は出ないはずだ。ならば僕は何をしよう。これから的人生をどう生きよう。否、僕は生きていてはいけないかもしない。僕は人を死なせ

すぎた。実際には、この菊田銀次という人間の身体を使っているのがいけないのかもしない。僕はこの身体を巧く扱えていない。だから僕に関わった人間は死んでいく。

この身体を巧く扱えれば。そう願つたところで、本当の持ち主以外にそれを成すことなど不可能だ。なら、僕はこの身体を彼に返して去ろう。

けれど、もう少しだけこの身体を使わせて欲しい。銀次、それで良いかい？

菊田銀次が使っていた部屋は引き払つた。少しの食料と衣類、金などだけを持って、僕は歩いた。少しでも長く、人が生きるこの世界を見ていきたいから。

見るものすべてが新鮮だ。青い空を見れば、清清しく感じ、沈む夕陽を見れば、切ない思いをする。雨が降る前の土の上には、自然を感じれる気がして心地が良い。ときには雨に打たれるのも気持ち良い。

こんな世界に純粹な気持ちで生きられる人間を羨ましく思つ。僕はもう、普通の生活を送ることなんて出来ない。それはこの身体の持ち主だって同じだ。僕の所為で、元に戻ったときには悪い思いをするだろう。僕が見てきたものをそつくりそのまま見てきたのだから、尚更だ。

本当にごめん。もう直接謝ることなど適わないのが残念だよ。数日後、殆どの荷物を盗まれた僕は、見覚えのあるコンビニを見つけた。外から覗くと、おでんの容器を持った恵莉がいた。

思わず僕は彼女に声を掛けた。何かいろいろと訊いてきたが、適当に答えておいた。そしておでんなどの代金を払つた。彼女は部屋に案内してくれた。彼女ならば僕を殺すだろうか。彼女は銃を持っている。そして死んでいるはずの僕を想つて、この身体を撃抜くだろうか。

そう思つていると、彼女は口を開いた。

「何故あなたはここに来たの？殺されるのが目的なの？」

「そうだね。殺されても良いと思っている。僕と深い繋がりを持つてしまった人は必ず死んでしまう。何故なんだろうね。死んで欲しくないと望んでも、彼らは皆死んでしまう。君、祐爾のこと好きだつたんでしょう？知ってるよ。前に、君に告白されたと聞いたから。それと、亜季を殺したのは君だ。原因はやっぱり僕なんだけれどね。ただ、関係のない人を巻き込んだのは君の責任だ。僕には関係ないよ。まあ、僕を殺したあと自分も死のうとしている人間には、何を言つても無駄なんだろうけどね。しかし本当に辛いよ。大好きな人が、どんどん死んでしまうのだから」

違う。すべての責任は僕にある。なのに口が勝手に動いてしまう。口だけではない。表情から何まで、何もかもが勝手に動く。

「亜季が死んで、一週間が経った頃だ。僕はマンションを引き払った。家具などは全部捨てた。何着かの服と、金さえあればそれで良い。まあそれの殆どが盗まれてしまつて、今やこの服と財布しかないけどね。カードが盗まれなかつたのは運が良かつたよ。そのおかげで死なずには済んでいるから。しかしおかしいよね。この世に存在してはいけない自分は、生きるのに必死なんだから。死にたくないなんて思つてはいけない存在なのにね」

何を言つているんだ？銀次、君だろう？君が動かしているのだろう？止める。そんなことをしたら、彼女は君を殺し、そして彼女も死んでしまう。それでいいはずがないだろ？

恵莉を見ると、机の引き出しから銃を取り出していた。そして自分がこめかみに銃口を突きつけている。

何故僕を撃たない？否、今はそんなことはどうでも良い。撃つんじやない。死ぬんじやない。声を出すことが出来ない。

彼女は引き金に人差し指を添えた。僕はそこで、自らの意識を断つた。

意識が戻ったと分かつたとき、僕はベッドの上で、仰向けに寝ていた。右手に違和感を感じ、それを見ると、恵莉が抱きついていた。これは夢だろ？

(現実だよ)

聴き覚えのある声。親友であった、この身体の所有者だった男の声が頭の中に響いてきた。

「……銀次、何で？」

少し間があつて、彼は質問を無視して語りかけた。

(俺たちは、不思議な出来事を体験した。このふざけた身体でな。そしてお前の愛する人と、その友達が死んだ。お前も含め、この身体があるからおかしくなっていく。たぶん、この身体の制御を出来るのは俺だけだと思う。それだけ危険な存在なんだ)

何を言っているのかがわからない。それでは銀次とこの身体は、別の人とのでもいうのだろうか。否、そんなことあるはずがない。「何を言っているんだい？ そんなこと有り得ない。身体と人格は一つだ。別の存在として有り得るはずがないじゃないか」

(じゃあ君は、どうしてその身体を使えるのかわかるかい？ 僕は君に身体を渡そうとはしたが、本当に出来るとは思つても見なかつた。それに俺の存在そのものは、この身体の中ですっと生き続けていた。この身体は“菊田銀次”と言う名前を持った、悪魔だ。死んだ人間ならば誰でも扱うことが出来る。否、何かしらの適応がなければならないのかな。例えば、この身体が原因で死に至つたとか) まだ現実味を帯びない言葉だけれど、それでも説得力がある。きっとこの身体を使ったことが無かつたらそんな言葉を信じることは出来なかつただろう。まだ信じきってはいないのだが。

(信じないのならばそれでもいい。俺だって自分が言つてのことが事実だと断言することは出来ない。それでも俺は、この身体を破棄しようと思う。そうすれば、恵莉さんは死なずに済むはずだ)

「恵莉は死はない、か。でも君の言葉が本当だとして、こんな身体がこの世に一つしか存在しないとは限らないじゃないか。ならばこの身体一つ消えたところで、何の意味も無いんじゃないか？」

この言葉は、死にたくない僕の言い訳に過ぎない。しかしそう思つてもいた。この広い世界に一つしかないものが、偶然僕たちの前に現れるなんてこと、あつていいわけがない。それに、一つしかなかつた場合、過去にこれに出会い、壊した人間がいるはずなのだ。今今までこの身体の危険性に気づく人がいなかつたなど、それこそありえないではないか。

（まあ、それもそうかもしれない。ただ、この身体が無くなることで、一人の女性を助けることが出来るんだ。この身体がある限り、また彼女は自ら命を絶とうとするかもしれないだろ？ もうそんなことをさせたくないんだよ俺は！）

「でも恵莉は、この身体の中に僕がいることに気づいた。ならば、この身体が消えたことによつて命を絶つてしまつと思う。そうした場合、結果は同じになるじゃないか。結局はこの身体に関わつてしまつた時点ですべては決まつてしまふんだよ。遅かれ早かれ、ね」

そう告げると、彼は黙つてしまつた。きっとそのことは分かつていたのだろう。彼はただ、魂の無い彼女の姿が見たくないだけなのだ。彼は恵莉が好きなのだ。彼には彼女のことを話したこともあるし、写真も見せた。そして僕が使うこの身体を通して、ほんの僅かではあるけれど、彼女を見ていた。それだけで、彼は恵莉に好意を抱いたのだ。別に不思議なことでもなんでもない。

僕だつて、亜季を一目見たときから好きだつたのだ。小さなきつかけさえあれば、誰でも人を好きになれる。少なくとも僕はそう思つてゐるのだ。

だから彼の気持ちだつてわからないでもない。

しかし僕は、愛していく女性が死んでもなお、生きることを望んでいる。恵莉が行き続けることを、彼が望むのであれば、僕は恵莉の側にいて護つていくつもりでいる。それでは駄目なのだろうか。

どんなに問いかけても、声は返ってこない。

僕は恵莉を起こさぬようベッドから出て、足音を立てずに玄関に立つた。自分は今、三日もの間着続けた服を身に着けたまま、靴を履いて外に出る。

悪足掻きは止めよう。彼の言つとおりにして失敗したことなんてあるだろうか。彼に背いて後悔したことはあっても、その逆は一度も無い。同じ身体を共有している今でも、それはきっと変わらない。僕と彼とは、元々違う人間。“親友”と言う名の絆はあれど、その中身を共有することなど、出来やしない。

マンションの屋上。柵を越え、端に立つと、あのときのことを思い出す。まだあれから一年も経っていないと言つのに、なにもかもが懐かしく感じる。僕が死んだこと、この身体を彼から貰つたこと、亜季が殺されたこと。すべてを失った今の僕にとつては、小さな出来事でしかない。

恵莉には、これまでのことをいつまでも覚えていないで欲しい。僕のこと、太田亜季のこと、菊田銀次のこと。みんな忘れてしまつて欲しい。こんなもの、この先何の役にも立たないだろう。ただ辛い想いをするだけでしかない。それならば、忘れてしまつたほうがどんなに幸せだろうか。

僕はそつと足を前に出す。下ろしても、そこには踏めるものなど無く、引力に任せて落下する。あの時とは違い、何も感じない。恐怖も不安も何もない。僕には、何もない。

彼女が寝ているはずの部屋の窓が見えた。そこから恵莉が笑顔で僕を見ていた。

僕はそれを見て、妙な気分になつた。

また繰り返される。僕らのような人間が、また増え続けてしまう。それがわかつたというのに、僕は微笑んでいる。僕のこの死も、また無意味だということが、おかしくて堪らない。

僕が最後に見た彼女のその表情は、亜季そのものだつた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1455b/>

---

Deep Bond

2010年10月9日03時22分発行